様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：２５５０２
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2012～2013
課題番号：２４６５３２５２

研究課題名（和文）多文化比較研究：子供の自己肯定感

研究課題名（英文）Cross-Cultural (Japan-UK) Quantitative/Qualitative Comparative Study on Children's Self-Perception and Agency

研究代表者
Ｍ・Ｓ　Ｈｉｇｇｉｎｓ（Higgins, Marilyn）

山口県立大学・国際文化学部・教授

研究者番号：４０２６４９８１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,000,000円、（間接経費）　300,000円

研究成果の概要（和文）：西日本とと英国の10ー12歳の児童を対象に、子供自身の「主体」感を明らかにするために、多角的な量的/質的調査を実施した。本研究の重要な課題は、子供が、役に立っているという感覚を強くし、自分たちの社会環境（家族、学校、地域）の改善に留意し貢献する能力を開発・助長する因子を見出すことである。その結果、英国の子供は、全般的に見て、日本の子供よりも高い主体感と自立心を示す傾向がある一方で、日本の子供は、外的報酬よりも「他の人と一緒であることの喜び」に動機づけられて集団の中で進んで努力しようとする傾向がみられた。支援役割レベルの高い子供は、より良い世界構築の手伝いが子供の役割だと考える傾向があった。

研究成果の概要（英文）：A multi-faceted quantitative/qualitative research project was carried out with 11-12-year old pupils in Western Japan (n=188) and 10-12 year-olds in England (n= 135) exploring the topic of children's own sense of"agency." The central question aimed at identifying factors that enable or encourage some children to develop a strong sense of helpfulness and the ability to notice and contribute to improvements in their social environments, be that home, school or community.Initial findings show a tendency for British children to display, overall, a higher sense of agency and independence, while Japanese children show a higher willingness to contribute in group efforts motivated by "enjoyment of being with others" rather than external rewards. Few differences were found in gender, or socio-economic status. But children with higher "agency" levels tended to consider the role of children in a wider context as helping to build a better world.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：比較教育　自己肯定感　draw-and-writeインタビュー　主体性

１．研究開始当初の背景

誰しも子供の成長と将来の社会的な貢献を願っている。しかし、そのための教育は文化や価値観によって国ごとに異なる。社会が用意する仕事につくことを目指してしっかり勉強するのが子供の「仕事」という国もあれば、子供のうちから社会や地域に貢献すべきだとする国もある。後者では、子供たち自身が「社会の役に立てる」と気づく体験や、ボランティア、大人との協力を通して「子供でも社会の一員として貢献できること」を学ぶことが期待されている。Hofstede (2001 年)は、日本社会を前者に類別している。日本では他国に比し子供と大人の「権力格差」が大きく、社会の役割規範は厳格に遵守され不明確さは避けるべきものとされている。問題の存在に気づきながらも「創造的解決」や「自主的行動」へと向かわせる機会を少なくする傾向が従来はあった。国際的課題で共働する機会が増えた現在は、自分の意見を表明し主導性をとることで外国人に遅れをとりがちだという自覚を日本人はもっているようだ。国際貢献をしたくないわけではないのに、社会的変革が必要な時にも、問題解決へ向けて個々人が動けないという傾向が強いのである。日本の文部科学省が「豊かな心で国際平和貢献に寄与する力」を教育目標に掲げる時代となり、英国では多文化教育がうたわれるなど、グローバル化が進む世界では子供たち自身の世界観と国際貢献への意識もまた各国で変わりつつあるのである。

2. 研究の目的

(1)急速に変化する文化的環境背景での子供たちの社会的資産と精神的強さを定性/量的評価するための実用的で有益な方法手段の試用と検証する。調査は日本と英国で実施する。

(2)子供たち(5-6 年生)の地域との関わり、思いやり関係、自己有効性などの認識と経験にフォーカスした DAP 定量調査データを分析し、親や教員との対話より得た調査データを更に分析する。

(3)量的/質的データを分析。データとその測定手法そのものの分析を基礎として文化の差を超えてこの研究方法が適用できるかを検討。

3. 研究の方法

(1)山口県下計 7 小学校（2012 年山陽小野田市 4 校、2013 年山口市 3 校）の 5, 6 年生とその親（保護者を含む、以下「親」と表記）を調査対象として準備を進めた。発達資産プロフィール（DAP）を利用した調査と、Hofstede による文化による違いの調査を実施した。DAP は、子供たちの健全な発育に繋がる 1200 以上に及ぶ要素の研究を行った Search 研究所（米国ミネソタ州）が開発した選択式のアンケートである。これは家族･学校･地域による支援と期待、時間の使い方などの「外的条件」だけでなく、学習への取り組み、価値観、自己同一感及び社会意識などの「内的条件」にも注目したものである。

我々は以下のような「文化による違い」の質問項目を DAP に加えた。子供の役割を子供自身がどうとらえているか、何をするどのような子供であることを期待されているか、その社会からの期待を子供がどのように理解しているのかといった内容である。具体的には Hofstede 著「Culture's Consequences」(2001 年)」から 3 つのテーマを選んだ。「男らしさ対女らしさ」で性別役割の意識を、「権力格差」で階級意識を、「不確実性回避」ではリスクを受け入れる姿勢を測った。子供たちと親でどの程度回答に異同があるかを調べるため親にも同様のアンケートを依頼した。DAP 関連の親へのアンケートは、時間の使い方、学習への取り組み、支援と力づけ、限界と期待、価値、社会適応性とアイデンティといった項目で構成した。「文化による違い」の部分は子供たちへのアンケート同様の構成とした。

同意書一式を加えたアンケートセットを 900 人に配布し、約 200 人からの回答を得た。その後、アンケートに答えた子供には 2 枚の絵を描きながらインタビューに答える draw-and-write 法への協力を依頼した。初めの絵は「自分がどのように家族、学校、地域に役だっていると思うか」、2 枚目は「役立つためにはどうするのがいいか」「そのためにはどのような壁があるか」そして「壁を乗り越えるためにはどのような助けが必要と考えるか」をテーマとした。あらかじめ訓練された調査助手が子供たちを 5～10 人グループに分け鉛筆で描画させ、インタビューを含めて1時間以内に完了した。最終的に全ての調査協力を得た子供の総数は日本では 188 名であった。

研究協力者である Gabriella Brundrett 博士は英国で 120 名の同年齢（10～12 歳）の調査を行った。

(2) 量的データ分析

量的データは Excel に入力し Search 研究所の DAP ガイドラインに従い分析を行った。

親の反応をそれぞれの子供のものと個別に比較した。また文化を基盤とした下位群、男女性間、社会経済的地位、また地域タイプ（農村、小都市、都市郊外、都会･大都会）も比較できるよう文化的データも入力処理した。社会経済的地位（SES）は、子供たちに親の職業を尋ね、英国のガイドラインに従って確認した（高位=専門的職種／高度専門職　中間位 = 一般的サラリーマン、低位=非熟練職種、パートタイムまたは失業中）。都会や大都会在住の外国人国籍による下位群との比較を考えていたが、データが少なく有意差を示すには至らなかった。

(3) 質的データ分析

質的データは、子供たちの返事と絵のテーマに注釈を加えたもののマトリックスを作成して分析した。お手伝いに関する子供の意識のマトリックスの構成要素は、必要性の有無、必要とするならその理由や方法、動機、実際の内容、期待できる効果、難しい点、プランニング、努力でき

る内面的な力などである。このマトリックスから子供たちのお手伝い･社会支援行動には以下の 5 つのレベルがあることが明かになった。

0＝潜在的主体性：手伝いの意識が皆無。要求された時、もしくは自ら気が向いた時のみ手伝う。
1＝緊急的主体性：早急に手伝いを頼まれた時、もしくは日常的に手伝いをしている。
2＝普通（日常的）主体性：他者からのニーズを察知する。ボランティアなど即急、または募金などの広汎な社会的ニーズに対しそれらに応えるため手伝いをする。
3＝高度の主体性：他者の欲求を察知し進んで助けようとする。広範な社会のニーズだけでなく、即急なニーズにも応えようとする。
4＝最高度の主体性：社会的ニーズと地域活動力の相互関係を理解し、積極的に地域貢献のため多面的な援助活動をする。

研究者が感じた「主体性得点」カテゴリーを含む DAP

この主体性レベルの類別をもとに分析を進め、まず「主体性得点」カテゴリーを含む DAP の質問項目との比較を行った。さらに、draw-and-write インタビューに見られる子供自らの表現を基本にした「主体性レベル」の振り分けは、量的データのより深い理解だけでなく、質的データから、他者への奉仕に向けたより高度な主体性発揮の扉を開く鍵の発見につながるものであり、子供の主体性の発育に関連した文化や心理的要素をより深く理解する一助ともなる。

４．研究成果

データは多様な観点で分析可能な豊かな情報源となった。

(1)初期分析においての気付きは今回の調査得点は 2010 年の前回調査時(Wilson)のものよりわずかに高いことであった。今回の総平均合計得点は 30 点満点中 21.8 点、外的資産は 22.7 点、内的資産 20.9 点であり、前回調査は同様に総平均得点 19.25 点、外的資産 19.9 点、内的資産 18.6 点であった。DAP 使用者マニュアル(Search 研究所)によると 26-30 点＝優れている、21―25 点＝良い、15―20 点＝普通、0―14 点＝乏しい、と判定される。前回の調査では「普通」と「良い」の間にあった日本の子供の発達資産は今回は、明らかに「良い」カテゴリーに入った。

また、英国の子供のサンプルの得点は「良い」で、外的資産 24.4 点、内的資産 22.1 点だった。ほぼ全ての DAP の下位カテゴリーで内外資産ともに平均的日本人の得点より著しく高いことがわかった。

「主体性(agency)」とは、社会状況を評価し、その改善をめざして、集団のために前向きに行動する個人の能力と定義している。より直接的にこの能力に焦点を絞るため、DAP の内的資産の項目を中心に 23 項目からなる下位尺度を選んだ。この尺度の DAP 全体に対する信頼性のチェックを行った結果、クロンバックの α 値＝0.87 で、内的整合性は保証されていた。

	DAP Item	平均	
		日本	英国
1	正しいと思うことは、はっきりものを言う	19.1	20.5
2	自分の人生や将来を自分でコントロールできると思う	*16.7*	*22.2*
3	自分のことが好き	*18.2*	*24.4*
4	危険なものや健康に悪いものは避ける	23.7	21.7
9	タバコや酒などの誘いはことわる	27.9	26.8
11	悲しみや喜びなどをきちんと表現できる	21.9	20.8
13	親にアドバイスを求める	19.6	23.5
14	いらいらした気持ちをよい方法で解消できる	16.1	18.8
15	難しいことに出会っても乗り越える力がある	18.9	21.8
16	他人を手助けすることは大切だと思う	26.6	26.1
19	悪い誘いを断ることができる	24.9	22.8
20	人を傷つけずに争いごとを解決できる	19.7	21.9
22	自分がやったことには責任が取れる	19.8	23.5
23	言いにくくても本当のことが言える	18.9	21.8
26	積極的に新しいことを学ぼうとしている	21.7	26.4
29	家の手伝いや家族の決定ごとに加わっている	21.3	22.5
30	自分の地域を良くするための活動に参加している	16.3	19.8
35	社会問題の解決に役に立とうとしている	15	20.3
36	人に役立つ仕事や役割を与えられている	19.2	23.5
39	他人の気持ちに共感できる	22.5	24.1
41	地域の人たちのためになることを自分から進んでいる	15.8	15.8
18	先を見通して適切な判断ができる	20.9	22.6
6	新しい友達をつくることが上手	19.2	23.0
	平均	20.1	22.3

の子供が低い値を示した項目に「社会的問題の解決に役に立とうとしている」があり、日本の 15 点に対して英国の平均は 20. 3 点とかなり高い値を示す。これらの数値から、教育者は子供たちの地域奉仕と社会問題の解決への意識の向上のため「人を助けることの重要性の認識」をどのように伸ばしていくかべきかを考えさせられる。

⑵ 親の統計分析も興味のある結果を表した。アンケートは α スコアによって信頼性を確認し、英国では子供の資産についての意識が日本のそ

れより全般にやや高得点だったが、両国とも親の意識のパターンは似通っていた。ところが、親と子を対比すると両者で逆相関するものがほとんどで、特に能力強化や学習に向けての態度については意識の差が大きかった。例えば、学習態度での親と子供との DAP カテゴリーでの相関はスピアマンの順位相関係数が-.476（ρ＜.001）、宿題の項目でも親と子供のデータはかなりの食い違い-.397（ρ＜.001）を示した。結局、親の期待が高いほど子供は自分がその期待に応えられないと低く評価しがちであり、逆に親が期待していない場合は、子供は自身が案外やれたと高く評価する傾向があると解釈できる。この考え方は draw-and-write インタビューと主体性レベルの結果からも支持される。

(3)文化尺度：以下の 2 つを対比して評価する。
1)文化が違う場合、子供が意識する社会の期待や価値感に差があるか否か。
2)子供たち個人の感じ方と周囲の期待との軋轢の有無。個人的、文化的期待像がどのように世代交代しているかを知るために同様のことを親にも質問した。

これらの項目は個人の感覚と文化背景的期待像が与え得る子供たちの主体感への影響についての見解を得ることを意図したものである。調査時間を短くするため各概念域（男らしさと女らしさ、権力格差、不確実性回避）から 3 から 6 つの質問をした。例えば「男らしさ」を構成するもの（Hofstede の多様な文化下での適応力と男女の役割に関する研究によると日本人はこれに顕著な高得点を示す）「家庭でのお手伝いは男子より女子の方がすべきだ」対「男子も女子も家庭では平等にお手伝いすべき」のような異なる意見にどの程度同意するかを問うた。また文化により異なる「空気」の読み方については、「私たちの社会では男子より女子が家庭でのお手伝いを奨励される」などの項目についての彼らの同意範囲を尋ねた。同様に権力格差感（教師対生徒、親対子供）、学習と成長のリスクを冒すか回避するかを尋ねた。
27 項目にわたる質問の結果、2 文化間の違いや、親子間での日英文化間のはっきりした違いは、期待に反して明らかにならなかった。

統計分析ではこれらの尺度のクロンバックの α 値は 0.03 から 0.44 で、内的整合性は保証されなかった。尺度の一貫性を決定するには項目が過少であった。

それにも関わらず、いくつかの傾向が現れた。日本の親は、英国の親より概して得点が高かったが、男らしさの尺度だけは英国の親が顕著に高得点だった(ρ<0.05)。また、日本の親は不確実性回避の必要性において有意に高かった（ρ<0.01）。

親と子のデータ全体を比較すると男らしさ、権力格差では顕著な相違はみられない。不確実性回避については、大人の方がやや強くその必要を感じていることが判った。

子供の反応の比較では日英とも、男らしさスケールは両者グループとも中間程度で大差はない。しかし、権力格差と不確実性回避では日本の子供の個人的見解が有意に高く（ρ<.001）、一方、英国の子供は彼らの社会が不確実性回避をどうみなすかの項目が有意に高かった（ρ<.001）。換言すると英国の子供は不確実性回避を必要とする度合が比較的高い自身の文化に個人的にはあまり束縛されていないとも言える。

文化的背景関連の概要を見ると、調査対象の日本人は日本が（男らしさを重視する）極端な競争社会だとは考えておらず、「日本人は子供たちの役割は将来に備えて勉強することだと厳しく定めている」とする Hofstede ら(2001 年)の報告とは食い違っている。権力格差はまだあり、不確定なリスクを回避しようとする傾向も続いてはいるが、過去の研究者の報告よりも協力と多様性を受け入れる傾向が強いという結果が得られた。これについての比較文化研究はより精密な方法で再調査するに値する。

(4)文化的相違のもうひとつの要素は調査対象の学校が農村、小都市または郊外か大都会であるかという位置の問題である。英国の場合、首都ロンドンは別に処理した。日本では農村部の子供たちは DAP の個人的項目への回答から学校に対しての満足度、自身へも確信も強い傾向がある。英国の都市、大都市域では子供たちは DAP での個人的項目でより高い確信を示した。（ρ<.05）そして 2 国のサンプル全体をひとつにまとめると都会の子供たちの主体性、家族の中での強さの感覚、学校、個人的資産、社会的つながりでも同様に有意に高得点であった。（ρ<.05）

(5)この研究で最も挑戦的かつ潜在的価値のある部分は子供たちから集まった draw-and-write データの分析に係る部分である。研究者はこの研究を通して、子供たちの子供としての役割の見解と子供と家庭、学校、地域とのそれぞれのつながりの中で役立つ存在である感覚により近づくことを目的とした。実はこのようなデータにアプローチする方法はいくつかある。

draw-and-write と他の類似した手法は今までも使われ、描画そのものが自身と環境をどうみているか内面の洞察となる。分析にあたっては描画の完成度、スタイル、躊躇または率直さなど気づきを加えた。しかし、この調査は子供たちの本当の思いと意見を引き出す有効な手法を決定することを当初の目的としていたので、彼らがどのように、またなぜお手伝いをし、子供としての役割をどう思うかについて各自との短い討論を始めるための「窓」として描画を選んだのであった。上記のように「主体性レベル」を計る尺度をあらたに提案した。尺度を評価する調査者間の違いがないという信頼性まで正式には評価できなかったが、英国での数日間のコースで個人的に共働したことによって主体性レベルの振り分けについてかなり首尾一貫したものとなったと考えている。

主観的に振り分けた「主体性レベル」と「DAP 平均値」は、スピアマン順位相関係数 ρ＝.256（ρ<0.01）で弱い相関性があり、「主体性レベル（Agency Level）」と「DAP 主体性得点（DAP Agency scores）」は、スピアマンの順位相関係数 ρ＝.287（ ρ＜0.01）で前者の相関性よりもわずかに強い相関性があった。主体性レベル得点 the Agency Level score の相関性結果は DAP の全カテゴリーにおいて同様であった。日本、英国間の子供たちは子供の役割について draw-and-write インタビューデータ分析で有意な差があった。絵の内容について、また子供たちのお手伝いへの動機づけについても同様であった（ρ＜.001）。日本の子供は男女とも 40%以上が家庭でのお手伝いの絵を描き、英国ではそれが 25%に留まった。英国の子供は約 3 分の 1 が他人を直接手伝っているか地域内活動に従事しているところを描いたが、それは日本の子供の 12%にすぎなかった。ところが、20%近い日本の子供は複数の絵を自分のページに描き、その場合彼らのほとんどは、被災者への募金、障害者介助といった類の地域活動を含んでいた。個々の描画についての話では、アンケートで「地域に貢献していない」と言った子供もそうとは気づかずに実際は貢献している傾向も明らかになった。事実、一定数の子供たちは描画後のインタビューで今まで意識していなかった活動をたくさんしていることに気づき嬉しそうに話をした。描画の舞台は家庭、学校、地域いずれでも自由な設定とした。しかし、比較的主体性得点が高い、また主体性レベル得点の高い子供たちは家庭外、地域でのお手伝いを描画する傾向にあることが興味深い発見であった。

潜在的主体性（レベル 0）の子供たちは言いつけられるか、あるケースではお手伝いへの「ご褒美」が動機づけに必要な傾向があった。半数以上の 60%がなぜ手伝うべきか確信がなかった。対照的に、レベル 1-2 の低い･普通の主体性レベルの子供は行動すること自体が好きだから、同情から手伝った、または他者から叱咤されたからとしていた。

レベル 3 の高い主体性の子供たちは「個人としての責任」だからお手伝いをすると答え、一方最も高度な主体性（レベル 5）では子供の「社会的責任」に触れ、家族と地域内でのリーダーとして自分の役割にたいして成熟した認識をもっていた。お手伝いの動機づけの因子としてテレビやメディアを挙げた子供はほとんど皆無であったことは興味深い。

高度主体性（レベル 5）の重要な要素は「計画」であった。英国の子供たちは計画づくり（プランニング）について積極的に意思表示した。彼らは遠い将来の専門、例えば医療やその類など、そしてそれに必要な効果的個人資産の発達に言及した。

日本の子供たちの 50%以上は全く将来計画への言及はなく、むしろ基本的な技術の習得に言及する傾向があった。英国の約 40%と比し、日本の子供たちの 70%が困難の克服には基本的技術が不可欠と感じていた。

困難克服のため必要な内面的な強さに関しては英国の子供の約 40%は全く 言及がなかった。両国とも 13%は他者の助けが必要と感じ、困難克服の討論では英国より日本の子供の多くが全般的知識の習得が必要と考えた。

子供の社会での役割認識の点においてのインタビューから基本的に 6 カテゴリーに特徴がみられた。（表参照）

これらは子供たちの得点と DAP 主体性を比較したものである。

日本 n=158	英国 n=121	役割認識	DAP	主体性レベル:
3	19	遊ぶこと	23.3	0.7
58	35	今もこれからも貢献する	23.0	1.6
39	20	将来のために習性を伸ばす	23.0	1.4
23	21	より良い世界への貢献する	24.1	2.2
24	3	将来のために勉強	20.5	1.3
11	23	基本的な用事をする	22.8	1.2

自分の役割を遊ぶことと表明した少数の子供たちは DAP 主体性項目でもより高得点を示し、一方ただ単に勉強すると考えた子供は 30 点満点の 19.9 点と最下位に該当し、将来のために勉強すると答えた英国の子供たちは 24.1 点と比較的高い DAP 得点を示した。将来のためによい習慣を身につけると答えた日本の子供たちは他の認識の子供より高い DAP 得点となった。一方、より良い世界へ貢献することが役割だとする広い展望の英国の子供たちは 25.1 点と平均して高く得点したのは興味深い。

＜考察＞

時間と手法が豊富であればこのデータに関し，より多くの特定の質問が可能となる。子供たちがどのようにひとつの主体性レベルから他のレベルへと成長できるか、その可能性は鍵となる質問の更なる分析と比較により明確化が可能と思われる。普及と出版のために、より広範な、もしくはより目標を絞った報告を準備している。現在、ここに示した「挑戦的かつ探究的プロジェクト」として、定性的な draw-and-write アプローチは特定の文化の影響下での子供たちを理解するのに多くの情報をもたらし有益である。それだけでなく、子供にかかわる大人である教師、教育関係者、子供たちの資産の成長を促すことを目的とした政策決定者が個人と社会発展に関する資産を理解するための有益性があると考える。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 0 件）

〔学会発表〕（計 1 件）

Higgins, M. (2013)「自己肯定感について～子供の絵からわかること（What we learn from children's drawings about Self-efficacy）」家庭教育学会研究大会　2013-02-09 山口県立大学

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
　Ｍ・Ｓ ヒギンズ（Higgins　Marilyn）　　）
　山口県立大学・国際文化学部・教授
　研究者番号：402164981

(2)研究分担者
　　（　　）

　研究者番号：

(3)連携研究者
　　（　　）

　研究者番号：